第４回新規恒久施設等の後利用に関するアドバイザリー会議　議事の内容

オリンピック・パラリンピック準備局

１　開催日時　　平成 28 年３月 31 日（木曜日）9:30 から 11:44 まで

２　開催場所　　都庁第一庁舎 42 階北塔　特別会議室Ａ

３　出席委員　　外部有識者委員　　７名
　　東京都委員　　12 名
　　組織委員会委員　　７名　　計 26 名

４　会議の公開　一般傍聴者　　６名

５　会議内容の概要

（１）開会のあいさつ

（２）副知事あいさつ

（３）これまでの検討過程等

（４）各施設の検討状況と課題

ア　オリンピックアクアティクスセンター

- 広告や看板や、あるいは最新のＩＴとか映像技術を使って、例えばさらに放送権料が上がるような仕組みだとか、従来ではないもう少し新しい、プールでも稼いでいくような、そういう後利用のあり方を検討してもいいのではないか。
- アクアティクスセンターにも、ほかのプールとの階層性というか、役割分担が必要。健康増進のための身近にやるプールに対して、アクアティクスセンターでは、晴れ舞台として発表会とか競技大会をやる。そういう発想が必要なのではないかと思う。
- 見に来る人も含めてトータルで利用者数をふやす努力が大事で、目標設定をして、検証しながら前に進んでいくべきと思う。
- 辰巳の森海浜公園と水面を挟んで夢の島公園もある。その中にはアーチェリー会場を初めさまざまなスポーツ施設があるので、まず夢の島公園と辰巳の森海浜公園の１枚の図面をつくった上で、そこにこの施設を置いた議論が必要である。
- 東京辰巳国際水泳場については、アクアティクスセンターとは違ったコンセプトで運営していくことで相乗効果を高められると思う。
- この場所は、多くの都民にとって認知度ですとかアクセシビリティという意味

で、やや遠い感じがする。もっと、アクセスのし易さや魅力的な場所であるというアピールをこれからの４年間をかけてやって頂きたい。

- 個人利用を促進するというのも一つの側面だとすれば、ここに帰属感を持つようなリピーターとか、そういう方々に帰属感を持っていただきやすいようなメンバーシップとか、少しでも工夫する必要がある。

イ　海の森水上競技場

- 地域資源をしっかりと把握したうえで、地域全体の魅力を検討、発信すべき。
- 連携を考えるにあたり、海の森公園の取り組みも確認しながら、連携についての議論をすべきである。
- 交通アクセスについて、特に平日利用のアクセスについて、後利用はしっかり検討する必要がある。
- マラソン、自転車、トライアスロンなど持久系スポーツは人気があり、交差点もなしに、１周回れるコースがあれば、人気が出ると思う。さらに、クラブハウスを設置し、クラブ化していくことで、定期的にお金を支払ってもらえるような仕組みも考えてよい。
- 海の森公園と一体にどのように開発するかを考える視点が必要で、埋立処分場であり、制約条件が厳しいため、ロンドンやシドニーの例をみると、このまま公園にするのが良いかもしれない。
- 近隣のゴルフ場の稼働率がよいと聞いているので、淡水化施設などと一緒にゴルフ場に開発し、採算が取れる民間事業者があれば、事業可能性というのを検討するのも一つの案。

ウ　有明アリーナ

- 有明アリーナは、東京ドーム並みのポテンシャルがあり、スポーツ施設、劇場型の多目的に使えるアリーナを中心とした商業地、住宅地、職業業務地の中核になる。
- 国際新都心と２号線を結び、有明アリーナ・晴海の選手村を通って東京ビッグサイトに至る都市軸を作ることが大切。
- トップ選手のためではなく、ジュニア世代へのスポーツ医科学が支援ができる場所があってもよい。
- その他の施設もそうだが、障害者用の車椅子スペースが圧倒的に足りない。また、あっても本当に必要な方が使用できない場合があるので、条例制定により規制し、より多くの方が利用できるように検討してほしい。
- コンサート利用の競争力を高めるために、楽屋や資材搬入路など必要な施設を充実させ、一流のアーティストに選ばれる施設にしていくべき。
- 周辺を面的に整備し、回遊性のある地区にすることで、地域の価値が変わる。
- スポーツ利用だけがレガシーではないので、多くの都民、国民に影響を及ぼすような、コンサート利用も立派なレガシーだと思う。
- 駅から会場までの道のりに商業施設など風情のあるものがあると、心理的なイ

メージが変わってくる。

- 回遊として豊洲との近接性を確保すると楽しくなる。

エ　カヌー・スラローム会場

- ディズニーリゾート、葛西臨海水族館、若洲ヨット練習場とマリンスポーツの集積地として、マリンレジャーの体験型テーマパークと位置付けて街づくりの単位でもっと大きく拡大して深くつくるべき。
- カヌーなど山のスポーツを都会で体験し、全国に体験者を誘致するなど、地方創生を後押しする施設として後利用ができればよい。
- 国内初の施設を活用し、初心者や一般の方向けのコンテンツを充実させ、カヌーを発展させるきっかけになればよい。
- 週末はレジャー施設として、平日・閑散期は消防の救助訓練含め企業研修の利用を促進すべき。
- 水を含め、環境にやさしく運用することが、日本の技術として重要になる。

（5）意見交換

- 各施設と主要な駅を系統的に循環し、点と点を自由に結べる仕組みを地域全体で考えると気軽にアクセスできる。
- 点と点をつなげ、面的に開発するために、鉄道は重要であり、2020 年に間に合わせるのではなく、その先を見据えた長期的なまちづくりで考えるべき。
- 各局で行われている議論と新規恒久施設の議論とをうまくかみ合わせるべきである。
- 多くの都民が、設計プロセス、状況について理解していない。もっとファンを作り、その方々が大会時にはボランティアになり、大会後には利用者になるとう連鎖を設計プロセスとしても考えるべき。
- 各施設の上位計画との関係も突き合わせて議論すべき。
- 競技団体と適切なリスクとコストとインセンティブの関係を作る必要がある。
- 施設管理においても、指定管理者や民間事業者など施設を管理する事業者と、事前に目標数値などの合意を得て行う。一方で、コストカットに重きを置き、サービス低下や事業者負担とならないよう、健全な運営を心掛ける必要がある。
- 特定の愛好家にとってのレガシーではなく、地域全体、都民の心理的な距離を縮めて、一般都民にとってもレガシーとなるようにすることが大切である。
- オリンピックの会場でしか会えない選手も大切だが、オープンな練習環境で、地域の人にも見ていただけるような場面を、戦略的に作ると良い。